

トンネル湧水の処理等における静岡県等の疑問・懸念事項

＜静岡県等が疑問に思っていること＞

- ・ JR 東海はリスク管理方針として「先進ボーリング坑からの湧水量 10m あたり 50ℓ/秒を管理値として設定する。湧水量が管理値に達した場合は、当該地点手前での掘削工事の一時中断、工法の変更、補助工法等により対処する。」「トンネル工事における、静岡県県内のトンネル（非常口、先進坑、本坑）の湧水量の上限を 3 m³/秒とする。突発湧水等過去最大級のトンネル湧水量の実績なども考慮して 3 m³/秒を上限にリスク管理を行うことは、技術的に可能であると考えています。」としています。
- ・ 一方、今回、JR 東海は、「畑薙山断層付近のトンネル工法として、下り勾配で掘削した場合、突発湧水時には切羽付近に一気に湧水が湧出し、ポンプ設備により汲み上げるものの、水没するリスクがあり、安全性に問題がある。」としています。
- ・ 「3 m³/秒を上限にリスク管理を行うことは、技術的に可能」としながら、一方で「水没するリスクがあり、安全性に問題がある」としているのは矛盾していると考えます。

＜静岡県等が懸念していること＞

- ・ 畑薙山断層付近を下り勾配で掘削した場合、突発湧水により水没するリスクがあるから施工できないという説明は、突発湧水が発生した場合、それを管理できない（十分に制御できない）可能性があるということである、と理解せざるを得ません。
- ・ 上向き勾配の掘削であれば、湧水はそのまま流下するので、想定外の湧出量でも問題ないとしていますが、想定を超える湧水は、ポンプアップ設備の容量を超え、そのまま流下してしまいます。
- ・ JR 東海は、以前の資料で、山陽新幹線福岡トンネルの工事中の湧水量を示したグラフを何度も提示していましたが、突発湧水が発生した場合、それが抜けきるまで待ってから工事を再開したとのことでした。それは、正に地下水を抜ききってしまうことを意味します。
- ・ 同様の手法で南アルプス工事を行った場合、大量の地下水が抜けきってしまうこととなりますので、水資源や自然環境に与える影響は極めて甚大なものになるのではないかと懸念しております。
- ・ また、9月13日の意見交換会において、JR 東海がトンネル工事中の表流水は減少しないといった内容の説明をしていましたが、私たちが問題にしているのは、トンネル近傍河川の表流水だけでなく、地下水も含めた大井川水系全体の水量です。JR 東海が、そういう認識を共有しているのかも懸念されるところです。

JR 東海には、上記の疑問や懸念を払拭できる科学的根拠に基づいた資料を作成し提示願います。